

- ・中世期、小島郷の古代寺院が存在した地域を基軸として宮谷寺を中心とする密教勢力が主流の時期があった。その後、古川盆地を所領とした姉小路氏と結びついた。
- ・16世紀初頭以降、姉小路氏の勢力が衰える時期と平行して宮谷寺の勢力も衰え、廃絶・転宗が相次ぐ。同時に真宗勢力が入り、この地域に浸透する。
- ・16世紀後半、金森氏による城下町形成によって、古川郷内の寺院勢力は増島城下に集約する。構成要素は当時この地域で多数派であった真宗を基本とするが、他宗派の寺院も城下における要素として必要であったと想定される（隣郷の小島郷内から実宝院を移転させる、禅宗の林昌寺等）。これらは中近世における古川盆地の宗教勢力の基本的な変遷として想定できる。

第8節 小結（姉小路氏城館跡周辺の空間構造の変遷）

これまでの検討から、姉小路氏城館跡を中心として、飛驒地域における武家拠点の構造・変遷を推測したい。なお、本項は先行して発表した各論考（大下永 2021a、b、d、f）の内容を含む。

1 姉小路氏・江馬氏を中心とする在地勢力段階における武家拠点の構造と変遷

江馬氏下館や岡前館は、同一地区において中世以前の人の営みが確認できることから、既存の土地利用のあり方を取り込んで再利用し、部分的に拡張したものと考えられる。このうち姉小路氏は古代以前より存在した集落や街道を取り込み、その一角に拠点の岡前館を構えた想定される。さらに天台宗の宮谷寺の影響が色濃い地域であったため、宗教勢力と協調を保ちつつ拠点を形成したものと想定される。一方、高原郷の江馬氏下館は、村落や寺社の配置が館の利用開始と関連していると想定され、14世紀段階の拠点集落のあり方がその後も引き継がれた可能性がある。姉小路氏は15世紀初頭には3家に分家するが、分家後の拠点（古川・小島・向小島・小鷹利）についても、拠点形成を画期とする武家屋敷地の整備や大規模な町場の改変は想定し難い。これらの山城について、それぞれの使用開始年代は不明であるが、国内勢力の争いが表面化する15世紀後半には本格的に使用が開始されたものと考えられる。しかし、各山城は立地として山麓の拠点集落と一体ではない場合が多く、山城の使用を契機として山麓部に新たな拠点が形成されたという形跡も希薄である。

一方、古川盆地内の山城における発掘調査成果によって、姉小路氏段階から山上において一定の滞在を行う利用が想定された。そのため、一部の山城については単なる詰め城としてだけでなく、限定的ながら居住を伴う利用が想定できる。一方で、山城で確認できる畝状空堀群や堀切等の遺構の一部は、その配置から盆地外からの敵の来襲に備えたものである。これらは16世紀前半までに起こった盆地内部の抗争ではなく、その後に入った三木氏が国外からの脅威に備えて改修した可能性がある。姉小路氏段階の利用状況と、最終段階の軍事的な利用状況は区別して考える必要があろう。

なお、江馬氏下館は方形居館の形状を呈し、16世紀初頭から半ばごろまでには廃絶している（飛驒市教育委員会 2010b・飛驒市教育委員会 2019e）。また、三木氏初期の拠点である桜洞城も同様に方形居館の形状であり、16世紀中頃に廃城になったと想定されている（下呂市教育委員会 2014a、馬場伸一郎 2014）。一方、16世紀後半まで精力的に活動するこの2氏の拠点が本拠地域内から消失したとは想定し難い。そのため、後の金森期以降の町場である高原郷の東町や益田郡の萩原については、河川・街道による流通往来を重視した在地勢力段階からの利用も想定しておく必要があろう。

2 三木氏段階における武家拠点の構造と変遷

文献史料によると、16世紀前半以降に三木氏が古川盆地に干渉し始め、16世紀第三四半期には姉小路氏3家のうち古川氏の名跡を継ぐ。詳細な経過は不明だが、程なくして古川・小鷹利氏の領主としての活動は見えなくなり、小島氏は三木氏傘下の武将として存続する。変わって、越中等の他国との関係の中で塩屋筑前守や牛丸備前守といった人物が史料に見えるようになる。

三木氏が古川盆地を掌握したと考えられる永禄年間から金森氏が入国する天正13年の約20年間について、古川盆地における武家拠点の様相は明らかではない。文献からは三木氏の本拠の意識は依然として益田郡を基本としつつ、高山盆地の三仏寺城や松倉城等も当主の居城として使用していたことが確認できる。一方、古川盆地においては、三木氏当主自身の活動の形跡は確認できず、僅かに確認できる当該期の寺社の金石文には、小島氏や牛丸氏の名が見える。このような状況から、三木氏当主ではなく、その家臣や傘下となった在地領主によって統治が行われた可能性が想定できる。

当該期の武家拠点について、これまでの縄張り研究によって、野口城・向小島城・小鷹利城については古川盆地外側に向けた畝状空堀群等の配置からこの時期における改修を想定している（岐阜県教育委員会2005）。また、小島氏は三木氏傘下の武将として存続し続けることや、天正10年にも史料で「小島城下」が確認できるから、小島城は継続的に使用されていたと想定される。

また、今回の発掘調査で出土した遺物の年代等によって、多くの山城に当該期の利用が想定できることが判明している。古川盆地の山城は主に軍事拠点として、ある程度の改修を行いながら使用され続けていたと想定できる。

それでは、当該期の山麓部や周辺部の拠点構造はどうであろうか。小島については、西麓部に真宗寺院を併う新たな町場が想定できる。野口・向小島・小鷹利については、遺跡地や好立地に存在する前段階からの拠点集落が継続し、山城等の武家拠点は単立の存在であった様相が想定された。最も拠点構造の変化が想定できるのが、古川である。古川城を中心として東麓・南麓（「下段」）には武家屋敷地の伝承のある平坦地群が確認できる。これらは現在のところ前段階の利用が確認できない地区であり、古川城の存在に引き寄せられる形で展開した可能性が高いと言える。また、宮川対岸の旧街道であったと想定される堤防道路に沿った「古町」という町場の存在も想定できる。この古町についても、対岸の古川城との関連が想定される。このように古川城については他の4城と違い、山城を中心として周辺に拠点としてのまとまりが確認できる。これらの空間構造や時代変遷は不明であるため、古川氏段階や金森氏段階を含めた長期の中での利用のあり方を想定する必要がある。しかし、少なくとも天正3年には「下ダン」に関連した人物が死亡していることから（大下永2020a）、この時期に利用されていた可能性は高いと言える。三木氏段階は、盆地における勢力の利用状況に応じて武家拠点のあり方も多様化していたと想定される。

3 金森氏段階における武家拠点の構造と変遷

金森氏の拠点意識（本城・支城） 寛永期における金森氏の拠点・古城の認識について、先行する論考で整理を行っている（大下永2021f）。「日本六十余州図」（【絵図1・2】、図版40～45）を確認すると、「城」としては唯一高山が見える。さらに「古城」として増島・東町・茂住・萩原・下呂・下原が見える。一国一城令の後であるため、城は本城の高山のみとなり、支城は廃され古城として描かれている。高山を本城とし、それ以外の古城が元和元年（1615）までの金森期における公式的な支城群と想定される。

しかし、この絵図に記されていない城郭についても、縄張り調査・発掘調査成果によって金森氏段階の改修・再利用が想定されているものがある。国絵図に描かれていない拠点のうち、鍋山城・古川城は『飛州志』に金森期の一時利用の伝承が伝わり、小島城についても『飛州千光寺記』に同様に金森氏の一時利用が伝わっている。関連して、中世城館跡総合調査によって、松倉城・鍋山城・古川城・小島城・東町城等について、地表面観察による縄張り研究から金森氏の一時利用を想定している（岐阜県教育委員会 2005）。

以上から、飛驒国内においては、国絵図に記された高山及び支城群と、それ以外にも在地勢力の拠点であった場所を金森氏が再利用した例は複数存在したと想定される。

飛驒の金森氏拠点の構造的特徴 金森氏拠点の構造的な特徴について谷畠博之が整理している（谷畠博之 1991）。さらに、先行する論考を含めた本調査における高山・増島・東町・小島・萩原の空間構造の検討によって、飛驒の金森氏拠点に共通して見える構造的な特徴は、以下のようなものが挙げられる。

- ・主要河川と支流の合流点付近に立地する。
- ・主要街道上や複数の街道の結節点に立地し、町人地に主要街道を取り込む。
- ・河川付近の自然堤防や河岸段丘を基軸に町場が展開する。
- ・城郭は虎口構造や石垣、天守相当の櫓等、織豊系の要素が見える。
- ・「城郭—武家地—町人地—河川」という配置構造。これらの地区は段丘崖や用水路によって区画される。増島のように地域に利用できる段差が無ければ用水路を設ける。
- ・町人地の街路は城郭方向ではなく、街道方向を基軸とするヨコ町型である。地割について、町人地は短冊型を基本とし、武家地はブロック型を基本とする。各街区の形状は長方形を志向するが、場所によって地形の制約を受けた不定形の部分も多く見える。

高山・増島・小島のみ確認できる構造 金森氏拠点のうち、本拠の高山や古川盆地の増島・小島のみを確認できる要素として、以下のようなものがある。

- ・町人地の主要街区は、武家地側から順に1～3の数詞を冠する街路を基軸として展開する。
- ・1番もしくは2番の町筋に主要街道を通す（小島は推定）。

これらについて、主な特徴である3街区が存在する地区は、いずれも遺跡の分布から前段階の土地利用が確認できないため、新規建造の町場と想定される。このように金森氏が建設した拠点は、織豊・近世の城下町を彷彿とする要素を認めつつも、数詞を冠する街区等の独自の特徴がある。金森氏の飛驒入国以前の拠点である越前大野は5番までの街区が想定できることから（登谷伸宏 2016）、数詞を冠する街区は金森氏による城下町づくりの特性であり、さらに3街区は飛驒国入国当時の基本方針であった可能性が想定できる。

金森氏城下町の構造 以上のように、飛驒国における金森氏城下町は、城郭と城下町の一体化・武家地と町人地の分け・短冊型地割と長方形街区を志向する計画的街区設定といった、近世城下町の構成要素が揃う明確な都市プランの施行が認められる。

在地勢力と金森氏の拠点形成で大きく違うものとして、立地的な環境が挙げられる。江馬氏下館や岡前館等、在地勢力段階の拠点は、自然堤防上や山際の河岸段丘上等、居住に適した立地環境を選定し、

多くは古代以前の散布地に根差した村落の形態を基本としている。一方、金森氏は河川の合流点や街道の結節点を取り込むことを重視し、敢えて水害が起こりやすい地区に拠点を形成している。城下町の体裁を整えるために大規模な土木工事は施工したものと想定されるが、河川から比較的距離がある地区や段丘上などの災害時に有利な場所に武家地・城郭を配置し、不利な立地にある河川沿いに町人地を配置して明確に区分している。この構造は飛驒国内のすべての金森氏城下町に共通している。先に上げた定型的要素は、このような拠点形成における立地的環境と不可分な関係にあると考えられる。

金森氏拠点の変遷案 金森氏は天正13年の入国直後から高山城・増島城の築城が開始する天正16年ごろにかけて、在地勢力の複数の拠点を再利用したと想定される。発掘調査成果によって古川盆地では小島城・古川城を使用した可能性が想定される。また、地籍図の地割パターンの検討から、このうち小島城周辺には町場形成の痕跡が認められる。したがって、小島には城郭と一体の町場を求め、古川には象徴的な軍事拠点としての役割を求めた可能性が想定される。また、小島については、南麓の町場が未完成であることから、城下町としての運用が本格的に開始される前に廃され、古川とともに拠点機能は増島城下に集約したと想定される。これは高山盆地や益田郡・高原郷など飛驒国内の各地域において同様の様相が想定される（大下永 2021f）。金森氏は在地勢力段階の山城を再利用しつつ、高山の小規模版ともいえる城下町を各地に建設し、各拠点を街道で結んで国内のネットワークを構築していたものと想定できる。古川盆地においては、最終的に増島城に集約する様相がうかがえ、増島が拠点都市として定まると、同一盆地内で臨時的に使用されていた古川城・小島城等の城郭は次第に役割を失い廃城になったと想定される。

元和元年以降、一国一城令によって増島城は廃城となり、17世紀後半には金森氏が出羽国に移封して飛驒国は幕府直轄地となる。その結果、増島城下からは武家という存在が抜け落ちることになる。増島城周辺における近世絵図や明治前期の地籍図を確認すると、高山と同じく城郭・武家地は耕地としての利用が主であり、町人地の拡大は街道に沿って展開していることが分かる。また、城下の町人地はほぼ全域が宅地であり、そのままの形で町場が残ったものと考えられる。これは高原郷の東町・船津周辺や益田郡の萩原周辺でも同様の状況が確認できる。このように各地の旧城下町の町場機能は高山に集束することなく残留し、近世の在郷町としてそれぞれ確立したものと推測される（大下永 2021f）。

4 飛驒国における武家拠点の変遷と姉小路氏城館跡の位置づけ

(1) 各勢力による変遷過程

以上、飛驒国の武家拠点について、古川盆地の姉小路氏城館跡を中心として、段階ごとに各拠点の空間構造・変遷を検討した。歴史的な背景として、飛驒国は16世紀に至っても周辺国のように有力な守護大名や戦国大名が登場せず、姉小路氏・江馬氏・三木氏等の国人クラスの領主が林立していた状況がある。古い段階の在地勢力の拠点は基本的に氾濫原を避け、居住に有利な自然堤防上や河岸段丘上を基軸とし、もともと存在した集落を利用する形で形成された。この段階では、武家屋敷・町場を一体として整備するような発展的な拠点形成の傾向は希薄である。例えば江馬氏下館・岡前館は周辺に位置する集落・街道と一定の距離を保っていた。同様に姉小路氏の分家以後の拠点と考えられる小島城（北麓地区）・向小島城・小鷹利城についても、拠点集落の空間的な広がりは一時的であった。この段階の山城は堀切・堅堀等の土造りの城郭遺構を基本としていた。この時期のものと考えられる

石垣状の遺構も少数ながら認められ、例えば古川城北部に位置する百足城跡（飛騨市古川町高野）では、試掘確認調査の際に石垣状の遺構を確認している（飛騨市教育委員会 2017b・2019a）。百足城跡の石垣は扁平な石を基底とする。垂直に近い勾配で裏込め石を伴わず、斜面保護の土留めとしての意識が強いものと想定される。他方で、小鷹利城跡の発掘調査によって向氏段階と推定される礎石建物跡を検出し、野口城跡の発掘調査では、主郭において多数の土師器皿片が出土している（飛騨市教育委員会 2019c・d、三好清超 2021）。これらの成果からは、山城を単なる詰め城としてではなく、一定の居住性をもって利用していた状況が想定できる。その一方で、地割パターンの検討では山城と拠点の一体的な配置関係は確認できない。小鷹利城や小島城において小規模な山麓拠点の存在が想定できるものの、山城の築城を画期としてその直下の山麓部の拠点を整備した形跡は全体的な傾向として希薄である。したがって、16 世紀初頭までの在地勢力段階の拠点は、武家勢力による集権的な整備は想定し難い。

16 世紀前半以降に勢力を伸張する三木氏について、元々の拠点であった桜洞城の構造は、基本的に江馬氏下館や岡前館に類似する方形居館であった。しかし、高山盆地に進出後の拠点である三仏寺・松倉等については、拠点・集落・寺社といった要素を一体的に配置していた可能性が想定される（大下永 2021f）。関連して古川盆地においては、古川城を中心として周辺に拠点としての要素が集約した様相が想定できる。古川の拠点空間がどのように変遷したか、三木氏の勢力がどの程度影響を与えたか、現時点で詳細は不明である。しかし、同一地域の他の拠点と比較した発展性から、三木氏の勢力が古川城を拠点として整備した可能性は想定できる。なお、益田郡の萩原周辺や高原郷の東町周辺についても、この段階には街道・河川に近い地域を流通往来の起点として利用していた可能性が想定される。16 世紀後半まで勢力を保つ三木氏・江馬氏といった勢力は、政情の変化に対応して、一定の発展性を持つ拠点形成を行った可能性が想定できる。

姉小路氏 3 家のうち、小島氏については唯一 16 世紀後半まで存続する。そのため、小島城については小島氏による継続的な使用が想定できる。天正 10 年段階で「小島町」という城下空間が存在することや中世創建の真宗寺院の配置から、16 世紀中頃以降に小島城を中心とする町場の展開が想定できる。一方、この時期には岡前館の使用を停止し、野口城・向小島城・小鷹利城の 3 城については、盆地の外部に向けた対外的な要衝として改修使用されたと想定される。16 世紀後半に活発化する飛騨国内の武将の対外進出や、国外の勢力の来襲に対応するため、古川盆地の各拠点の役割も分化していたと想定される。

このような武家拠点形成のあり方に強権的に統一政権のあり方をもたらしたのが、織豊武将の金森氏である。高山や増島をはじめとする飛騨国内の金森氏城下町の特徴は、以下の 3 点に集約される。

- ①主要河川と支流の合流点や街道の結節点を押さえる立地。
- ②城郭は石垣や天守相当の櫓台、石垣を伴う虎口等によって、麓からの遠望を意識した整備を行っている。これらの拠点の一部は在地勢力の居城を再利用する。
- ③高山・増島を指標とする「城郭—武家地—町人地—河川」という配置構造。町人地は街道に沿ったヨコ町型であり、内部には主要街道を取り込む。

このうち、①については氾濫が起きやすい河川の合流地点や低湿地を好んで選定し、地形の克服を図っている。これは氾濫原を避けた自然堤防上や河岸段丘上に拠点を求めた在地勢力と明確な差異と言える。②について、これらの遺構が存在することが金森氏の改修を決定づけるものではないが、実際に高山・増島・東町といった町場を伴う城郭は、全域にこれらの要素を多く確認できる。さらに今回の

総合調査によって、古川盆地では小島城・古川城でこのようなあり方が想定できる。③について、このような階層的な配置関係が、近世以降の主要な町場となるいずれの拠点でも確認できる。これらの地区同士は段丘崖や用水路によって区分される。また、町人地に主要街道を取り込む様相や町人地が街道を重視したヨコ町型構造である等、複数の共通事項が確認できる。さらに高山・増島といった拠点については、町人地の主要街区が1～3の数詞を冠する3街区で構成されるという特徴がある。また、近世以降は町場として存続しなかった小島についても、同様の構造が読み取れる。その後の土地利用のあり方から計画段階で中止したと推測されるが、小島についても前段階の拠点を利用した町場形成の動きが推測できる。当地域における小島・古川の事例からは、古川盆地における金森氏の段階的な拠点形成のあり方が推定できる。金森氏は織豊権力の拠点形成のあり方を飛驒に導入するにあたって、高山・増島を指標とする定型的要素（階層による配置関係、町人地の3街区、町人地内の主要街道等）を基本としつつ、宗教勢力や前段階の城郭・町場の構造といった各地域独自の要素を加味して既存の要素を再利用する等の調整を加えたものと推定される。

（2）姉小路氏城館跡から見る飛驒国の武家拠点の変遷過程

姉小路氏城館跡（古川城・小島城・野口城・向小島城・小鷹利城）が所在する古川盆地は、姉小路氏入国直後に使用されたと想定される岡前館の段階から、姉小路氏3家の分家や戦国期の三木氏による影響を経て、16世紀末に金森氏の増島城下に集約するという、歴史的変遷が確認できる。姉小路氏当初の拠点と想定される岡前館は氾濫原を避けた段丘上に存在し、古くから人が居住し続けた地域に根差したものであった。街道や宗教勢力を伴いつつも、家臣団屋敷や町場に代表されるような大規模な拠点形成を行うものではなかったと想定される。これは江馬氏下館・桜洞等、飛驒の他の国人領主でも同様の傾向があり、一定の普遍性が認められる。戦国期に飛驒国も戦乱が頻発すると、各勢力は山上の拠点を求めるようになったと想定される。各山城周辺における検討では、古川城を除いて山麓部の拠点形成の痕跡は希薄である。このうち、小鷹利城・小島城には山麓部の小規模な拠点が想定できるが、方形区画をもつ武家屋敷群や、一体的な町場整備は読み取れない。そのため、山城を使用しながら既存の拠点地域を引き続き利用した様相が推定される。今回、調査によって小鷹利城や野口城の山上で一定の居住性が認められた事は、拠点地域の居住が困難である場合であっても山麓部の拠点を設けることもできない、特殊な状況が存在した可能性を示唆する。

16世紀に入ると三木氏が台頭し、16世紀中頃以降は古川盆地も三木氏の勢力によって押さえられたと想定される。三木氏の古川盆地の統治がどの様であったかを想定することは困難であるが、古川では山城を中心とする武家屋敷や町場といった要素のまとまりが想定できる。また、小島において既存集落とは別に小島町という町場の存在が想定できる。峠に面した野口城・向小島城・小鷹利城周辺の拠点集落の様相に変化は認められないが、城郭遺構の配置から三木氏勢力によって盆地全体を防御する装置の一部として、山城が利用された様相が想定される。このように、戦国後期に古川盆地を拠点とした勢力は姉小路氏段階の拠点を利用しつつも、より広域の統治に対応するため、状況に応じて拠点の役割を変化させていた様相が垣間見える。

その後、織豊武将である金森氏の入国によって、飛驒における武家拠点形成のあり方は大きく変化する。城下町・武家地・町場をゾーニングして一体的に配置し、街道を町場に取り込む構造が見える。短冊型地割・長方形街区のセットや宗教勢力の町場への集中も確認できる。このような計画的な町場

整備を施行する近世城下町のあり方は飛驒国にとって初めてのものであり、金森氏が以後も領主であり続けたことによって近世以降の町場展開のあり方を決定づけるものとなったと想定される。その中において、増島城下は町人地の3街区等の構造から、特に本拠の高山との類似点が多い。古川については、一時的に城郭を利用しつつ、段階的に古川城周辺に存在した町場機能を増島に集約させた様相が想定できる。小島については、城を中心として西・南麓の地区に新たな城下町形成を計画しつつ、途中段階で建設を中止した様相が想定できる。これらの構造は、急速かつ強権的に豊臣政権のあり方を導入しつつ、もともと地域に存在した要素を利用しながら都度修正を加えた結果と想定される。さらに、小島に高山・増島と同様の数詞を冠する3街区が存在することは、古川盆地という場所の歴史的・地理的な重要性を、金森氏が入国当初から着目していた可能性が想定できる。このような小島・古川の様相は近世以降に構造が変遷した城下町にはない、織豊期における限定された時期の拠点形成を検討する上で貴重な事例と言える。

本章では、古川盆地が岡前館や姉小路氏城館跡を中心として、長期間断続的に武家拠点が展開しつつ、最終的に増島城下を経て近世在郷町の飛驒古川へ至った過程を推測した。その結果から、この地域は中世から近世に至るまでの武家拠点の変遷過程を途切れなく検討できる数少ない地域と言える。さらに、このいずれの段階においても、飛驒一国の武家勢力のあり方の一端を物語る指標的な事例が確認できる。よって、古川盆地は中世から近世に至る武家勢力や政治的背景の変遷によって、拠点構造が推移した様相を飛驒一国レベルに置き換えて推定可能な地域として評価できよう。

以上の検討は歴史地理的な方法と視点を主としており、仮説や推定を多く含んでいる。そのため、古川盆地内外における各種の調査成果を反映しながら、継続的に内容の検証・修正を図る必要がある。

【第6章 引用参考文献】

- 蘆田伊人編 1968『大日本地誌大系 斐太後風土記』雄山閣（富田礼彦 1873『斐太後風土記』）
- 大下永 2020a「＜史料紹介＞高野山不動院所蔵「飛驒国過去帳（一）」『飛驒の中世』第11号、飛驒中世史の会
- 大下永 2021a「飛驒における武家拠点の変遷と小島・東町城下町の構造」『中井均先生退職記念論集 城郭研究と考古学』サンライズ出版
- 大下永 2021b「明治前期の地籍図からみる武家拠点周辺の空間構造～飛驒市の事例を中心に～」『飛驒市歴史文化調査室報』第3集、飛驒市教育委員会
- 大下永 2021d「飛驒北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷―姉小路・江馬から金森へ」『戦国・織豊期の地域社会と城下町―東国編―』戎光祥出版
- 大下永 2021f「飛驒における武家拠点」『「武家拠点科研」福井研究集会資料集』『武家拠点科研』事務局
- 大平愛子 1997「江馬氏下館跡周辺の近世村落の復原」『江馬氏城館跡Ⅲ―下館跡南辺の調査―』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 岡村利平編 1909『飛州志』住伊書店（長谷川忠嵩『飛州志』（享保年間））
- 岡村利平校訂 1914『飛驒叢書第三巻 飛驒遺乗合府』住伊書店（桐山力所編『飛驒遺乗合府』（江戸末期）、1986年復刻版、かすみ文庫を参照）
- 神岡町 1980『神岡町史 資料編別巻』